

〔連載〕 武蔵御嶽神社宝物シリーズ16
齋藤信廣奉納正宗太刀

日本風俗史学会 会員 齋藤慎一
青梅市文化財保護審議会 会長

享保四年（一七一九）六月二十八日、神主大原左衛門と当主前内膳から、寺社奉行月番（酒井修理大夫忠音）役人望月平左衛門へ提出の「武蔵御嶽蔵王権現内陳（陣）神宝目録」（黒田忠雄家文書）には赤糸威鎧や紫裾濃鎧も書き上げられている。下書ではあるが、今のところ網羅的で公式な最古の目録である。

今回の正宗太刀は、この目録の太刀二八振中、最も詳細に「一、銘正宗 但ひら（刀身）ニ武刃安松村信廣ト納銘有り 達磨正宗ト申来候 奉納年数相不知申候 三尺七寸」と書き上げられる太刀である。不明であるという奉納年数も、佩表に、弘治四年（一五五八）

月八」と辛じて、確認

できるのである。一方「新編武蔵風土記稿」「武蔵野話」「御嶽山・一石山紀行」では奉納年月を弘治四年閏二月とする。年と二の間は磨滅するが余白は二文字分である。また弘治四年の閏月は二月ではなく六月だから、後述するよう干支で「戊午」とすべきである。現在のように磨滅する以前に判読した大正一四年（一九二五）刊行の「東京府史蹟名勝天然記念物調査報告書 第三冊」の積文は、ほゞ旧状を伝えて貴重である。

まず佩裏の鋒から44.0 cmに始まり4.5 cmにわたり区際へ8.5 cmの余白をのこして「奉納御（御）嶽御（御）剣（劔）武州（分）入東

郡安松之郷（村）野老澤住人齋（濟）藤主計祐（助）信廣」と読む。（一）内は今回の観察で判読した正しい文字で、府の報告は表記の変改と誤読が二箇所あるが、基本的に正確である。佩表は、磨滅が甚だしいが、区際から17.5 cmの余白で8.5 cmの長さで「弘治四年戊午（午）二月八日」と読む。年は午の誤植と思われる。

後年、弘化三年（一八四〇）二月八日に、奉納者齋藤信廣の子孫齋藤幸作高吉一門が巨鐸（釣鐘）を奉納したのは二月八日という太刀刻銘を意識したためであろう。また安政五年（一八五八）戊午四月五日に幸作の子武左衛門信久が講元として太々神楽を奉納した（黒田忠雄家文書）のは戊午という太刀奉納の干支へのこだわりである。太々神楽奉納の願文にも「先祖齋藤主計之佐信廣弘治四年戊午二月八日以正宗太刀奉納」と述べて

刻銘の旧状を伝え、府調査報告書の読みを裏付けている。

かくて室町後期一五五八年二月八日に、この太刀が奉納されたことを確定し得た。しかも二月八日という御嶽でも重要な神事・日の出祭当日の奉納である。日の出祭はかつて旧暦二月八日早朝に執行されていた。その中の納太刀という儀式（明暦四年（一六五八）三月二十七日裁許状・金井家文書）の存在までも推定できることは貴重である。

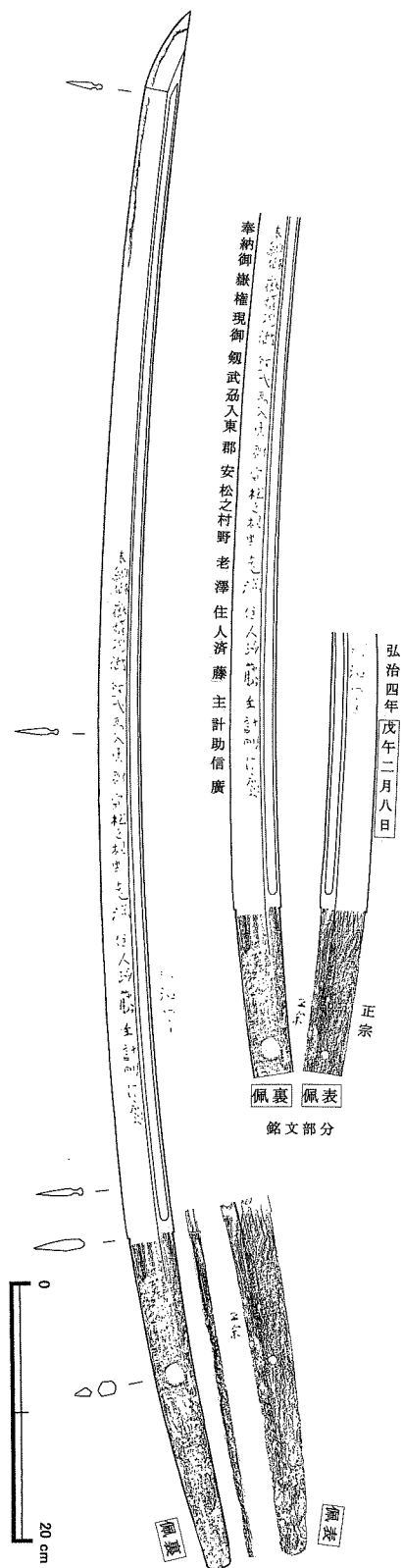
太刀は茎も含めて全長119.5 cm、重量1.31 kg。区際で幅3.64 cm、厚さ0.75と大ぶりである。全体の反は、茎尻から71.4 cmの辺で深さ5.4 cm。刃部の長さ93.5 cm。その反は鋒先から48.5 cmの辺で3.2 cmの深さ。中程を中心に反り、茎方向にやや反りが強い。樋は丸棟に沿って通る。奉納以前に実用された見え、鋒から16.5 cm、33 cm、42.8 cmの辺の棟三ヶ所に打痕がある。鋒は幅2.66

cm、長さ61 cmの大鋒である。「所澤市史」（昭和三〇年刊）によると齋藤信廣は扇ヶ谷上杉朝定の臣丹波輔利道の孫で、天文一五年（一五四八）の川越夜戦で朝定敗死、利道は討死、よって信広は父利長と共に所沢に土着、旧家として代々名主などに任じたという。前掲の幸作と武左衛門は子孫である。太刀の打撃痕は刀痕で大永・天文頃の齋藤家の武功を伝えるものであろう。茎の長さ26.0 cm、佩表の区際から7.0 cm、棟寄りに実にささやかに「正宗」の銘を切る。

府の調査報告書が「正宗の銘信ずるべからず」と述べたのは鎌倉後期の相州正宗を念頭ににしたからであるが、銘ぶりからも無論相州正宗ではあり得ない。御嶽の正宗は、下原鍛冶の古刀期の正宗であろう。この御嶽の正宗は「古今鍛冶備考」「古今銘雑録」等に「正宗 武州恩方村下原 二字名ニ打 大永」とある（東京府文化財調査報告書22「刀工下原鍛冶」昭和四四年刊）、下原正宗に該当すると思われる。下原鍛冶の専門家の検討研究を期待したい。

なお、この下原正宗太刀は享保一二年（一七二七）閏正月三日付で八代將軍吉宗から重忠鎧（赤糸威）と鞍鎧と共に特に指定されて、上覧に供されたのである（金井家文書）。その後安永七年（一七七八）三月五日、十代將軍家治の上覧に当り、寺社奉行所へ提出の「武蔵国号神社神宝并宝物伝記」（金井家文書）に、吉宗はこの正宗を上覧して「達磨正宗」と無之御嶽正宗と号（す）べし」と評したという当時の伝聞を記録している。吉宗は下原正宗と鑑定したので

あろうか。御嶽には、刻銘から日の出祭を特定して奉納したと考えられる下原鍛冶を主とした刀剣が、弘治四年から寛文一二年（一六七二）迄九振あり、日の出祭への信仰と祭儀の古さを伝える。その中でも最古の下原古刀として、この正宗は貴重な存在と思われる。調査には、製図を担当した伊藤博司氏をはじめ寺本靖氏、北村和寛氏の助力を頂いた。銘記して謝意を表す。



濟藤主計助信廣奉納太刀・下原正宗実測図
（弘治四年戊午二月八日）
作図 伊藤博司氏